

◆伊藤洋二 選 ～俳句歳時記より～

出所：合本俳句歳時記第三版 角川書店 平成九年五月三十日初版

【秋】

秋蟬も泣き蓑虫も泣くのみぞ 高浜虚子

鳴いている秋蟬に滲むのは①「基礎分泌の涙」か将又②「反射分泌の涙」なのか。「人間」は進化の過程で、これらに加え悲喜交々の③「感情分泌の涙」を授かった。秋の西風に揺られ泣きじゃくる様な蓑虫に滲むのは、やがて来る冬の厳しさを嘆く「感情分泌の涙」に違いない。筆者は更に④「加齢分泌の涙」が時おり滲むのだ。

霧島は霧にかくれて赤とんぼ 種田山頭火

筆者が十数年間暮らした宮崎市から西へ約五〇キロに霧島連峰が聳えています。南東部に開ける都城盆地からの眺めは素晴らしいものです。有史以降も噴火を繰り返す活火山で霧島温泉郷も有名です。時として噴き出す湯霧で一面真っ白に、霧島はまさに霧に雲隠れし、突然その間から編隊飛行の赤とんぼが襲来する。

白桃に入れし刃先の種を割る 橋本多佳子

桃の薄皮をむぐのがもどかしかった頃、齧り付いた感触は今も蘇ります。その種には

毒があるので割ってはダメと教えられましたが、好奇心旺盛の折、ついつい見みたい衝動に負け金づちで一撃、そこには「小種」がありました。刃先が種の割れ目に入り

一気に切り分け四等分に、子供三人に一切れずつ。残り一切れの行方や如何に。

鶏頭の十四五本もありぬべし 正岡子規

「鶏頭論争」というものがあつたと知った筆者はまたもや子規先生の偉大さに驚嘆するのである。そして「私が選んだ滑稽句」に投稿することで学び、その神髄に触れたかのような満足感に浸るのである。「お気に入りの拙句」を砥部焼にしています。ある時酒に酔った勢いで「五枚組」を約束しました。歴史に残ると信じつつ完成！

【冬】

年暮ぬ笠きて草鞋はきながら 松尾芭蕉

貞享年間の頃、伊賀上野に帰郷の折の句、帰省の喜びは今昔を問わない。仕事を済ませ東京駅の新幹線に飛び乗り缶ビールを「プシュ」。至福の時を迎える。宇高連絡船の時代「伊予弁」「デッキのうどん」「棧橋走り」が懐かしい。田端義夫さんの「かえり船」。♪ 臉あわせりや臉ににじむ霧の波止場の銅鑼の音～♪。

松山の城を見おろす寒さかな 正岡子規

松山城は、標高一三二mの山頂に本丸があり、日本三大連立式平山城の一つで、道後平野の各方面から天守閣が見えます。つまり風通しが良いのです。二月～三月ごろ四国の南岸を低気圧が通るとき、この「猛烈低気圧君」、空からお城を見物に来たのです。今日は寒いことない？ 熟田津にも雪がちらほら。

**風花を美しと見て憂しと見て** 星野立子

風花とは、晴れた空を雪がひとひらずつ舞い落ちることで、越後に降った雪が谷川岳を越えて関八州に吹き込む。上州地方では吹越とも。瀬戸内育ちの筆者には雪は「美し」であり「憂し」の想いは無かった。が、新潟に旅行した時、長いトンネルを抜けると雪国であった。真っ白に圧倒され少々おセンチに。

**襟巻の狐の顔は別に在り** 高浜虚子

ひと昔前、初詣のご婦人が艶やかな着物に狐の襟巻をお召しになっておりました。銜えたその口と恨めしそうな眼差しに樟腦の香り。畏怖の念を覚えたものである。一般的にそのご婦人は所謂「きつね顔」（美人である）であった。最近、狐にはお目にかかりません。今日の成人式の襟巻は羽毛ショールとか。

**湯豆腐やいのちの果てのうすあかり** 久保田万太郎

食事もとらず明日の会議資料作り。退社が八時過ぎ。何時もの駅前が十時前。そして何時もの赤ちょうちん。とりあえずのビールで一息。何時もの湯豆腐の美味しい事。熱燗のコップ酒に口を持って行く。喉を温め五臓六腑に染み渡る。明日から出張である。コンビニ弁当と餡パンを買って帰ろう。朝七時出発。

**水仙や束ねし花のそむきあひ** 中村汀女

水仙の花言葉の「うぬぼれ」「自己愛」は、水鏡に映った自分の姿に恋をしてスイセンになってしまった美少年ナルキッソスの伝説に由来するとのこと。背きあっているとは切り花にして束ねたからのこと。彼らにとっては預かり知らぬこと。地に足が着いている時にはちゃんと棲み分けていた。切り花の定め悲し。

**枯蓮のうごく時きてみなうごく** 西東三鬼

枯蓮の動くときは新年用のレンコンを掘り出す師走の頃か。師走の師は先生とも、お坊さんとも云われるが、とにかく世間が騒々しくなる。現役世代は責任感とその達成感に奔走する。そうでない世代はどうすれば？ 昔の隠居制度では「ワカイシ」に身代を預け習い事に没頭した。人生五十年の頃。今や八十年。

赤蕪を一つ逸らしぬ水迅く

山口 青邨

幕末ごろ、伊予松山の座敷歌「伊予節」に唄われた名物に“緋のかぶら”。塩漬けの赤かぶを砂糖と橙酢の漬け床に、真中まで緋色に染まり漬け上がる。更に“高井の里”には弘法大師が杖をついて清水を湧き出させたと言い伝えられている「杖の淵（じょうのふち）」がある。ほじゃけん、いっぺん、おいでんか。